

『 校園長のリーダーシップ 』

伊丹市教育長 木下 誠

学校現場には、どこの学校においても学力問題や生徒指導などの課題が山積しています。また、学校独自の課題もあります。校長や園長は、自校の実態に応じた『独自のビジョン』を策定して、「特色ある学校づくり」を推進していかなければなりません。今回は、「今、校園長に求められている必要な資質とは何か」を考えてみました。

第1は、校園長としての『ビジョン（理念）』です。生徒指導を例にとっても、教員がばらばらの考え方や方法で対応していたのでは、児童生徒や保護者に不信感や不満が生じ高い効果は得られません。考え方や基準などの「ベクトル（方向）」を合わせることによって初めて大きな力となるのです。教職員の「ベクトル」を合わせ、「モチベーション（意欲）」を上げるために「ビジョン」は不可欠なものです。

第2は、『ストラテジー（戦略）』です。学力問題を例にとっても、確実に成果を上げている学校には、中期的・短期的な戦略があります。どのような時期に、誰（学校・家庭など）がどのようなことに取り組むのかが明らかにされています。戦略を立てるには、校園長が一人で考え、悩むこともよいと思いますが、少人数でプロジェクトチーム等を作り、知恵やアイデアを出し合うことはとても有効だと思います。

第3は、『チェック（検証）』です。それぞれに取り組んできた教育活動が、どれだけ「成果」が上がったかをきちんと検証することが必要です。「やりっぱなし」では効果は期待できません。トヨタ自動車の社訓に「カイゼン」ということばがありますが、常に検証、改善を重ねていくことで成果はより確かなものになるのです。

第4は、『アピール（情報発信）』です。今の時代、教育は学校だけで完結するものではありません。保護者や地域の方々の「理解と協力」が不可欠です。情報を提供することによって、初めて、家庭や地域において、何をすればよいか明確になります。また、それぞれが傍観的な立場ではなく、「当事者としての自覚と責任」が生まれてくるのではないかと思います。

教育に携わる者にとって、校長や園長になることが、決して最終目標ではないはずです。校園長の立場でしかできない「自分ならではの取り組み」を確信を持って実践して、自校の子どもや教員を幸せにする（元気にする）ことだと思います。校園長の真の評価は、その立場を終えたあとで、出てくるのではないのでしょうか。



O(御池中)G(御所南小)T(高倉小)での「読解力」

11月9日(金)、小中一貫教育に取り組まれている京都市立御池中学校・御所南小学校・高倉小学校で一斉の研究発表会が行われました。この3校では、「読解力」をつけることを目的に、小学校では「読解科」、中学校では「読解の時間」において特徴的な取り組みが行われています。

読解力を育てる4つの力

①課題設定力

自分の学習課題を見つけたり、決めたりする力。課題解決への見通しを持ち、学習計画を立てる力。

②情報活用力

課題解決に必要な情報を収集したり選択したりして、自分の考えを構築する力。

③記述力

自分の考えを、様式や条件を意識して、明確に表現する力。

④コミュニケーション力

相手の考えを理解し、また、自分の考えを相手が納得できるように表現し、互いに交流する中で、さらに自分の考えを深めていく力。

授業展開

①子ども主体の学習を構想する

「何について」、「どのような目的で」考えるかを明確にし、できるだけ子どもだけで考え、練り上げ、まとめていくよう、適切な学習の流れ・形態・方法を構想し、習慣化する。

②学びのプロセスを重視する

まず一人で考え、他者と交流して考えを練り上げ、最後には再び一人で考えをまとめるという「一人→グループ→一人」という学習の過程を繰り返す。

③言語活動の充実を図る

授業の中に、記録・報告・紹介、提案・協議・討論など、様々な目的の記述・話し合いの機会を意図的に設定する。

④思考と言語の関連を図る

情報を整理・分析する際の方法として、分類や比較、関連や統合、類推や具体化・抽象化等を取り入れ、思考を広げて、言語と関連づけて活用する。

⑤コンパクトに書く指導

字数制限など、決められた条件のもとで、書くことを繰り返し、自分の考えを適切な言葉で要約できるようにする。

⑥多様な資料を活用する力を育成する

文章、写真やグラフ等の特徴を理解し、課題設定や課題解決の際、資料を効果的に活用できる単元構想・指導方法を工夫する。

⑦表現する場面に着目し、評価・改善に活かす

子どもが表現する内容を評価し、そこに表れた子どもの思考・判断の過程や結果を、指導に活かす。

成果

①文章やグラフ等の見方や読み方、考え方が培われる。

②文章やグラフ等を多面的・批判的に読む力が高まる。

【ここがみそ！】

全国学力学習状況調査において国語、算数・数学とも全国よりも平均正答率が上回っている。特に、国語B、算数・数学B問題における記述式の解答類型においては、「無回答」の割合が全国に比較して低く、「準正答」・「正答」の割合が高くなっている。

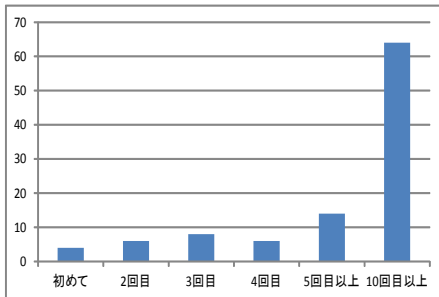
『読解科』授業の実際

単元名「知ってる?? みんな大好き 京都の魅力!」(小学校4年生)

各資料から、読み取れることは何か。考えましょう。

①京都を訪れた回数

(人)



②京都を訪れる目的
ベスト3

	目的	割合
1	京都観光	52.1%
2	仕事	32.8%
3	買い物	9.4%

③京都を訪れて感動したこと
ベスト3

	感動したこと	割合
1	寺社・神社など	25.1%
2	自然・風景	25.1%
3	町の雰囲気	9.2%

授業で子どもたちに向け、用意された資料は上記も含めて、6つありました。

- ①「京都を訪れた回数」②「京都を訪れる目的ベスト3」③「京都を訪れて感動したことベスト3」④「京都を訪れた人の思い(1)」⑤「関西地方の重要文化財の数」⑥「京都を訪れた人の思い(2)」。

授業の流れ

- ①各資料から分かる情報をワークシートに記述させ、発表させる。
- ②各資料から取り出した情報を関連づけて理由を考えワークシートに記述させ、グループで交流させる。
- ③交流した時、友だちの意見での新たな気づきをワークシートに赤字で記入させる。
- ④一人一人がクラス全体に対して、発表させる。
- ⑤最後の振り返りをワークシートに記入する。

ワークシート

- ①ワークシートに各資料から読み取った情報をまとめていた。
- ②他の子どもが発言した内容を赤字で記入していた。他人の意見を書くことで、子どもたちは新しい見方や考え方に気づき、深めることができていた。

板書

板書はワークシートと同じ構成になっており、子どもが何を書けばいいのかわからず、間違えにくいよう、工夫されていた。



特別支援教育豆知識 その7



「二次障がいとは…」

発達障がいのある子どもたちには、同年齢の子どもたちと同じようにできることもあれば、集中力を持続しにくい、感覚刺激をうまく取り込めない、コミュニケーションが苦手など、極端にできないこともあります。そのため、他の人からは「怠けている」「ふざけている」と見られることがあります。また、本人も、周りの人ができることがどうして自分にはできないのかわからず、「自分はダメな人間だ」と自己否定したり、周囲の人のせいにしたりしてしまふことがあります。その結果、「二次障がい」として、いじめや引きこもりなど、社会生活上の困難さが生じる場合があります。

NPO法人ラヴィータ研究所の米田和子先生（今年度第4回特別支援教育研修会講師）は、発達障がいのある思春期の子どもの「二次障がい」を防ぐために

- ・「自己肯定感を持つこと（これで良いのだという安心感）」
- ・「自己認知をできること（自分の得意・苦手を知る）」
- ・「苦手なことに直面した場合、助けを求めれば良いこと（助けてもらえば、良いという安心感）」
- ・「他者との違いを知り、受け入れられること（幼児期からの友だち関係作り）」

が大切であると述べておられます。


発達障がいにかかわらず、一人一人の違いを認めあい、それぞれが自分の持つ力を発揮できる、学級、学校を作りましょう。

カリセン耳より情報 その4

授業力向上（カリキュラム）支援センターの図書貸し出し方法については4月号でお知らせしていますが、新たに発注した図書がどんどん到着しています。今年度は、国語、算数・数学、理科に関する本を中心に、新学習指導要領に対応した書籍や、学力向上や生徒指導等の導教育課題を踏まえた書籍を整備しています。また、「ご意見箱」にいただいたリクエストにもお答えしました。

帰宅途中にちょっとカリセンに立ち寄り、本を借りて帰る。その積み重ねがきっとあなたの「教師力アップ」につながるはず！

【新着紹介】（ごく一部です！）ぜひご活用ください。



教科の本質がわかる授業シリーズ
国語の本質が
わかる授業

柴田義松 監修
(日本標準)

シリーズ全6巻（一部内容紹介）

①入門期とその発展—読み・ことば・作文—

- ・あらすじだけをつかむ授業になっていませんか？

③話すこと・聞くこと

- ・スピーチ—めあてにそって発表できていますか？
- ・学習グループによる話し合い—話し合いを効率よく進められていますか？

学年と学期に応じた話すこと・聞くことの基本の能力の育成—中学校—	井上 一郎 編著	明治図書
感情をうまく伝えられない子への 切りかえことば22	湯汲 英史	すずき出版
イラスト版 体育のコツ 運動が得意になる 43の基本レッスン	山本 豪	合同出版
悲から生をつむぐ「河北新報」編集委員の震災記録300日	寺島 英弥	講談社